

宮井敏先生を送る

樋口秀雄

宮井敏先生は昭和十九年兵庫県立第一神戸中学校から、当時すでに高等女学校などでは科目から外されていた「英語」をもっぱら学ぼうとして同志社外事専門学校英語科に進学された。時の校長灘波紋吉（のち神戸女学院長）、教頭上野直蔵（のち同志社総長）両先生の薫陶を受けられたが、戦争末期の状況はますます激しく、学徒動員、学徒出陣などのきびしい体験のあと、平和の甦った同志社学園に再び学ばれる事になった。つづいて同志社大学文学部英文学科を旧制最後の卒業生として出られてのち、直ちに出来たばかりの大学院文学研究科英文学専攻をおえられ、本学初の文学修士として文学部英文学科助手に就任された。翌年早くも新設の短期大学部英語科専任講師に任ぜられ、齊藤亥三雄（のち同志社理事長）、桜井忠一（のち平安女学院長）両先生の指導の下に教鞭をとられ、学生主任を命ぜられた。時に先生26歳。以来商学部において助教授、教授となり今日まで満四十年、教えて倦む事なく、同志社英学校以来百十五年を越す伝統を背に、クラス数五百、延登録人員二万数千と云う本学最古最大の科目の最先任教授として重きをなされ、今日の日を迎えられる事となった。大学院生以来、御厚情をかたじけのうした者として、かえりみて深い感概をおぼえるものである。

先生の御専門は近現代イギリス文学であり、三十を越す論文を残していられるが、数十年にわたって人文科学系列「文学」を講じて来られた視点は名古屋帝大文学部長に転じられた加藤龍太郎先生の学風に従うものであったと伺っている。また、文学批評の姿勢としては三年にわたって学ばれた峰人矢野禾積先生（のち東京都立大学学長、日本英文学会長）の近英文芸思想史に

教えられる事大であった、との事であるが、先生の該博を極めた社会思想史の理解（商学部における十二単位の教養ゼミ、宮井演習「ユートピア思想」からはすでに大学助教授が出ている）と、時に神学研究科で臨時代講を勤められた程の深いキリスト教理解の二点ではすでに出藍の思いを感じる人も少なくあるまい。

最初に『主流』に三回に渡って掲載された「グレアム・グリーンの小説」が当時の英文科生の間でも評判となり、この三号分のみがたちまちストック切れとなった、と云うのは昔の逸話であるが、『英語青年』CXI, No.6の「E.ウォーの conservatism」をものされるきっかけとなった「E.ウォーの政治諷刺」同26号と共に英文学会誌を復刊された先生と『主流』の因縁からざるものを感じさせる。『人文学』90号の「W.ゴールディングの寓意性」も当時注目を浴びたが、これに「多大の示唆を得た」と註記した後輩の論文が同志社大学英文学会賞を受賞したと云う話も興味深いものがある。

同95号の「G.オーウェルとスペイン市民戦争」は『英国小説研究』第9号で「本年度最高の論文」と激賞されたものであるが、「政治諷刺と国家権力」、「I.マードック, Irish Nationalism の問題」、「政治諷刺と anarchism」などと共に、先生の研究方法を不動のものとした業績と云えよう。また、「Dystopia としてのG.オーウェルの1984」、「W.モリスの Utopia」、「News from Nowhere」などから発展して、「ユートピアの変質過程」「矢野龍溪の新社会」など、一連のユートピア研究も異彩を放っているが、後者はとくに朝日新聞が学芸欄でとり上げていたのを記憶している。

先生は書評の面でも十数篇をものされているが、「シンデレラ・コンプレックス」のように編集委員が論文として扱ったものや、「カズオ・イシグロ」のように書評論文という肩書きをつけられたものなどこの方面でも話題に事欠かぬようであるが、以上の御業績はいづれ、それぞれおまとめになる事であろう。

先生は同志社大学同和教育委員会発足以来17年、たゞ一人欠かす事なく幹

事として、時に晝に到る追及をも避ける事なく、又、同和教育科目運営委員会でも終始、担当者、責任者として困難な教職課程科目必修科目の運営に当って来られ、障害者問題委員会では発足以来十年委員長として両校地の障害者施設を全国大学のモデルケースとなるまで手がけてこられた。法人本部に於ては湯浅八郎、住谷悦治両総長につぐ三人目の教職員出身の法人評議員会議長として同志社学園全体の運営に当ってこられた。

同志社大学人文科学研究所の兼担研究員としても数多くの業績を二十年にわたって積んで来られたが、今後も、同志社を代表する「第一研究」に属して、二度にわたる専従研究員の研究をおまとめになると思われる。今後ますますの御活躍を念願してやまないものである。